



燕石  
十種  
近世  
江都  
著聞  
集

四  
輯  
六

信  
679  
98



679  
38

近世江都著聞集



元祿記顯之古今著聞集者建長曆應兩合其撰者宇治



亞相之戲語也後續著聞者和歌山亞相之狂言也唯人

每其證不詳開怪言多書其誠以虛以虛為誠更殆嚴

隱、顯、聖所美也因爰江都著聞碎虛實借其名耳

寶曆七年丑の

暮秋

武江講師

馬文耕

近世江戸芸文集序

久方の所の此帝の書并なふれ殿とやら人のされし芸文  
集ありまことちうきと成るも居んと好きわさより續芸文集と  
出せしと世界に鳴る事たひしはこれは大芸圃といふ所  
或書肆のいしれりはたもとと家系乃すまことまの著圃に  
字居わふ乃あ大納言に概をいまう大芸圃の誰やらんその中  
もも口をいそやまひりふすしれりたといひしをたはれんを必  
めくそそたにうすりの山登乃大納言つらりしをいし名付し  
近世江戸芸圃集といはれしと題号やめく書肆駿友  
了るしす也

近世江戸著聞集惣目録

卷一

一 八百屋お七秋月妙栄傳

吉祥寺門前お七席山田左之衛門事は件世に  
流布のお七傳の疑惑を何れ其実を何れ  
に不たす

卷二

一 松竹毒天和政要

湯嶋此類の事傳の事  
世傳の湯嶋の事一松竹毒と云疑惑を其  
を何れに解す

卷三

一 新枝本所白子屋お徳仇名と赤加賀や長多郎

実儀乃并

世をいふ保十一年の御評定日記を細いものより  
りしきことを除くまの實の并なり

卷四

一 白子や一族七夫し并

此件は好くく公実の日記よりとりて公実  
を何れしと記す也

卷五

一 接女傳より傳

一 月猪心傳

一 月奥州傳

一 月玉榮傳

此をいふ世に接女乃らるる面白き事ありし實を

ひねりしと記すなり

卷六

一 中津喜水傳

此をいふお宿女やく老乃氣をいふ所要し實を  
あらしむる事あり

卷七

一 中村が長驛路の并

一 不和名古巻の履赤乃并

一 山中仙家志具の并

此件は名人蘇我の氣を感しし事ありし實あり  
りし事あり

卷八

一 市川女半見榮傳

板心喧嘩乃本由始終  
此件を寢實永忠信と云雜書乃寢實を解して  
その美を歌ひよまへ

卷九

一 佐野次郎左衛門 万字を八ッ指

右衛門

此件ハ杜若といふ系人のハッ指といふ世女ふまゝの  
くもるおきも十寸徳大和の鬘を通鑑のかんぢる  
おをそま実を歌ひよめて傳を揚るまゝ

卷十

一 寄宿妓傳介り傳

山村津宗本假傳分の事

此件を忠俊の匠史よまゝといふまゝの美人の  
おかづりををりよる如く

卷十一

一 多賀長湖画工百人女高島津智遠流後辛英

一 蝶とよの事

親世左吉右衛門の妙をゆへ事并新神感意乃事  
此一件を元禄の秘説といふと実の誠をりよ  
るまゝ

感解形

- 一 公卿お七一件のそ原の御奉り中山何果度乃日記をそ
- 一 家臣中山獨とそ考り又見とそをわとそ
- 一 白鳥やお徳の一件の予を東新我本町又徳居してそ須
- 一 公卿かろり人そ地り多くつとをわとそ
- 一 托女の傳一件の古遊りいし傳つる海多き中
- 一 托客の事知り群臣の老長予少かりをわとそ
- 一 少長驛所の各ハ晋子う新棋子をそとそそ内徳く
- 一 海ふ
- 一 不破の夢履赤い蘇井地朝つとをわとそ
- 一 山中仙家う怒吳の各ハ先年菅新とそ粒之他りの物語を
- 一 わとそ
- 一 佐佐木う丸馬の傳り 公卿記録りか事そ有

- 一 由直同竹某と云々を修む所りし人等小なるをわと云
- 一 秀貞妓傳脚の事ハ所の長老ね生るんやせし事を多く  
かゝる是をわと云
- 一 多賀岳の如く云々を流の人の現るよりを儀席の
- 一 毎款講りおくら其の調よきをわと云
- 一 観世左衛門傳の事ハ礼儀の云々所新梅若治忠虎の云  
左衛門子也と云居ち其の如くをわと云

演

秋田秋直物語

拾遺

右の如く書ふ云々秋田の家申千中弱断とて強勁の事  
を云々〜記し是の如く秘乃事多〜載る所なり今編  
集事早の辺る筆耕事早吹聴と云ふ所〜依る事なり  
そを云々〜す而也

近世の著聞集 卷一

八百巻お七の傳

をわと云乃の傳

いさ〜は書見ふは終ふ不あり

いはひと〜人の志す中途中〜おひと〜命を  
浪りと一変〜を起す〜この中心あるを合意乃書見乃  
風雅面白〜賢を賢と〜云ふよう〜の格云々〜でも  
是格意強乃乃〜命をも〜或は心中と〜お對り  
死する事ある事もある喜ばれ〜彼が家事人の心  
の花山と〜との場なり〜む〜神〜つら  
む〜乃江戸鹿の子と仇名を〜め〜程言奇語の媒と〜し  
八百やお七と云ふ女の美傳世〜知る人なり〜唯〜高なる乃  
心の上つ〜よりや〜ませり〜陽り〜天和貞喜乃



庵にてあき文庫よりそまの書をひきとりそ意致を秘記して  
家不傳よさんバ今小石川の南縁心象兼寺 天名あかり元日蓮宗の  
元福の山 安永より  
今天名山上の末とある お七が石碑よりして人々を驚かす  
天和二年三月十九日秋月妙果と云書あり 一と塚を築き  
つりといふもを幸塚所なきや所のねまの没者お七のねまの  
れが墓をわらぬをさる向香をさる増修をさる回向信者とも事  
とねまの誠なるも一つの次女の花と云なり根元お七が  
二子國の大守花田家の足燈を勤一山所三と云書あり  
寛文年中浪人として武士を止所人と威勢は近分江所  
町といふ所は八百やをもとめて八百やを築きお七と名を  
後世より夫婦子なき子を歎き日以日蓮宗乃信者なり  
祖師大菩薩鬼子母神七面を祈りなり文持法華福不可量  
をぞ祈るひるかき一と一女をひきとりひとよ七字の法影自

のまかりとよ七面大母神のゆかりとそ名をお七とけきりゆ  
縁月よりしてお七隊長と云うひ容赦なくひりく英うと見  
情を通せん半をさるひりなりお七が生年ハ寛文八年十月  
なりと 一の苗書を見たりお七十日某の年の三月は時天  
那りともや丸心妙寺と云寺より出火して本御色駒込の  
れらに焼失し及て此後八百屋と云書も数焼もお七に小石川  
象兼寺ハお七の信現存の中肉縁なりハ親子二人を御象兼  
ゆて居たり象兼寺に御持人をいしよりお七の御書ありハ  
寺も月よりゆき象兼寺のありたりと云書も御書ありハ  
衣類食支等をもさるひりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり  
三人はゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり  
成居たりける山田佐吉と云人なり此人ハ 二儀沖旗お七  
重吉の次男ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

四好寺なれど修くを修をのりまんと爲り家々居きり後  
年山田佐々島津忠徳ありあり 文廟 章廟二君ははく  
それとて事をねえ奇徳のさふく 思きそを名を唱ず山性吉帝  
とやい言此乃ちひこね佐々島おつて英男うして宗陽連徳も  
たもまはしてなかりびをさうなる男たりける世も遠田中  
お七の心たすびもたがひよあるもの口をさして山田がたりあり  
いさぶのいのちをあらわぬ意のいふことおのひその人のれ國をま  
びつらぬお乃ねのかさなりといふ 夫婦のかさひさり  
されいそ整すおのま川山浪さういとおのひのふりしにそ年の  
及ぶおの成りり 舊家の焼失の地よりいそま家居さつて福  
さくき痛も新おころいそ人と寺よいそを乞ねる寺のあかきり  
佐々島地に七の寺よいそありし佐々島事をあらわす隙も  
あく唯明言をさういそむ福を修すさうたりおやありとい人の

ら病のいそいそぬきりいそ漢世をさりり 吉とてやとそ甚くふり  
福のりもそ者さうたりたりいそをさうのそ之酒て親の効あ  
うけをささうらういそりりいそ或けいそおの寺院やとて程火消  
危あたまいそ入て勸りそ者のいそ名をさえていそいそ事いそ宣  
呪きいそいそいそいそいそいそいそいそいそいそいそいそいそ  
いそて居り是を吉祥寺の吉とらゆとねえいそいそいそいそいそいそ  
男がいそいそいそいそいそいそ

そ後いそいそ吉と道心と云ふ心者の坊をりていそいそ  
地を建させりいそいそいそ人得て吉とる心いそいそいそいそいそ  
あゆいそいそ七天和の御仕並後吉とる心いそいそいそいそいそ  
吊りいそいそいそ地を建させりいそいそいそいそいそいそいそ  
倉の執りいそいそいそいそいそいそいそいそいそいそいそいそ  
いそ地を建させりいそいそいそいそいそいそいそいそいそいそ



門の裏門より刻つて金銀衣服を奪ひとりて家物よせん  
切りひたり大悪無道の吉三郎石馬とて人相をたつりきり  
お七をかきりにまじりて角柱を折るをてつてこの家の火を  
消し焼拂ひ盡すべく勢くなく一乗能を仕るを意のな  
とて消火の志をうてし指す一八百を斗桶するれば印の  
家をばとて指す處に沈れが罪もあらまじり悪の悪事法の  
佛もばとてうてしなまじりたればお七をかきりにまじりて  
未だに集火大なる福の地獄にたつとも何のいさかしの  
いともそ通すて同乗寺にたつとも吉三郎は悪して或時風  
をきりてまじりたればお七をかきりにまじりてお七が  
風流にたつて燃よりてお七が大仕事と成りて騒動に斜吉と  
ひたりたつて煙の中をさまりて八百を乃家へお七を見れば  
お七は吉三郎の婦にうてしお七をかきりにまじりてお七の  
お七は吉三郎の婦にうてしお七をかきりにまじりてお七の

吉三郎はうてしお七をかきりにまじりてお七の  
ぬすまてお七は吉三郎の婦にうてしお七をかきりにまじりて  
の盗賊改の中心勅を由馬とてお七をかきりにまじりて  
吉三郎はうてしお七をかきりにまじりてお七の  
お七は吉三郎の婦にうてしお七をかきりにまじりてお七の

近世の著聞集巻之二

松竹梅天和政要

をむくはるのなむけり

蛇 喰ふときけの恐ろし 雛子のあつ

るき脚くき次喜を多きき色の姿を又うらうらうと云ひの  
道行と云ふとよまれども内流ゆけの蛇喰ふと云ふ思ふと  
るも外面似并内心如款及乃心とていざれいづれも形も西施楊  
貴妃のようこそ心産みの悪意物たるも多しと云ふと一喜あれ  
ば世とて天下の大法を獲しうらむとてうらうらうと云ふの涙も  
好しうらうらも駒込きの火車の音も中瀬城改の中山初々由  
自に搦捕るを後掬官せしれ今夜の火附の女あつるを  
ゆきを洞馬よのせと中山の責強りれい音うらうらと云ふと  
附火いといふず作駒込の火附八百屋の娘お七と云ふ者の所為とて

惟と云ふことよりふりてそ若紀ゆゑ及故もあ七をなせられて  
市詮家とて一とそ八百屋一家の者并町家の長ども不渉ふ世  
詮家とて一音三節あ七對交を 徳有く世一音の申説ふ不及して  
忽白状りあふびいりも火を附けし細い物と申すふ  
よつては法のがるるなき極もあ一あ七い入牢を 徳有きり八百屋  
をいふ信主婦のたむぎなきあつたけり減り女心の一節より一なき  
事を仕出して親のつねと世のそ一利害とありあ世と天か  
に死地をたて涙淵をたすといわらるるをやりしを一移して中心  
勅解由敏の詮家房美より身をり御定法を火阿づりよ  
徳有ひ事と御教ををたされりる時ふを御定法をたれば事あ世も  
たふき世仕直火阿づり言り有る老中方のあるえあつたを以て并  
大炊利緒と云賢人として申されきり減り情たのきああひ  
うね件の女い不役と云に不足ははとも 我朝治世お後民を君の

徳ふきりして戸ご一をいすを及を徳を群を徳を刑罰のたつて痛  
當とたりし徳教をけいけいして徳おとるう忽御代たり想して天  
に罪人多く出たりこの政よあ徳をるゆくと唐土の堯舜と云聖人  
の徳とれりともや我朝もとも天智天皇のを教の御衣をぬせ給ふ  
事を兼れば減ふともその旨一それ當時執権職として天下の  
政を司り將軍家を攝統ともなり古きと今をわが女の大  
附より大罪をゆす世者大法をたしめれば國法定めわつていりあも  
大阿づりともなきことこれ世世界とて一君の御ふ徳と  
みまなき事ゆゑ我朝のあざりりたうげかきりも凌ぐる一満  
出朝録大明もいりゆけり日本神國といひ人の心も忠なり  
世とおひしに男なりいひも小女の身なり如是の大罪人出る事  
れそあ一と國ゆりて笑ひ人々を怪るるを一と減り大徳は徳  
実の君より一と一旦の理ふかりりる始終日本の振擡を申す

あふと我理りすづねてとどろけ或時大炊政ハ中山勅テ由を  
咄まひ今夜か七が罪のなれごとく来うれをかといひてい  
さうしたるれども天中の御神辱なり何とぞ一通り遠流な  
どと極刑かといふまじくはきたうく家初沙弥法  
て是此ふおとすいけい年十六歳と終つてきりども能く  
は版を今一及沙弥法と申ひる二十五以下は國棟をたし  
らうも子儀事ハ又を罪を一版以下省めらうもこそ  
先うれが罪の極子こそ家く火を有る因宗寺と申らん  
といふ又是ころいひもたうき世むの子女の情之能く陰養と  
とぞりきり中山の御長りのいそし退きさて後よお七が親  
二人のなきは後あつていひひひひひひひひひひひひひひ  
あつても衣飾なりと申せ七がし夜の泣く涙ハ大人の心  
らた大い子た心よそお七をこそまじくせし老なる心

らたあ十六歳と申上ひがうりしと解を申上登り大切の事  
とこそ對しる遠しつりを申上る事わくを急夜也やうん  
と急夜やうんハ二親町前の老ハ中山友の言葉のほしをゆきて  
大さふ怪びいふも御意のぞく世女の御く南年十六歳と申  
はともかき者も後行方成とも御意と申す申上り申上り申上り  
てはとも御意と申すとお親もこそ方も御く沙弥法と申す申上り  
後十六歳と申し御意とも右通申すつて此とねを通り申す  
一の者町人ハ御意とも十は御と御意ともいふも右通申す申上り  
とこそ書しつる御意を御しつてね名を家も右通申す申上り  
いりりきりも外のうを言すつてつて美よつて父い子乃為よか  
子の父の為よかす申す事と申すことハ御意ハ御人の説りぬ  
あつても叶つて是ハ中山殿のお七を出家させて家来中山獨  
者ハ御意と申す因同御意と申す御意と申す御意と申す御意

り是いと云り去井利徳の實仁にして 公儀の汚名を思ひ忠  
貞の致ししこと云々一物も交はらぬ人なりし事一吉三郎  
大悪業居のくせ者なりしが七が罪を定めのらるることを精をそめて  
この罪をいせらるる事を残さるる様一中山殿一辨人一きりお七  
年十三年一してその罪をゆり一縁の由義のいはいふあり  
公儀の汚名は清くといふや凡願願依怙のたきを心をなれとたくれ  
女なるより川と中山殿をいふ音のむぐの省めのさうふゆをさ  
かゆ大罪を助けたるなりし様一公儀を何とていふなりや  
と云ふ言りたるを中山大いと思つたのれめくき大罪人なり知れし前  
後をもあつた女といふことすしして公儀を何とていふなり  
紙せんがわがむをどうして火を付すといふも正しくその罪いこと  
と云ふ縁居の悪人なりし事一公儀は昔三郎歎き知した縁居なり  
まの心周りと物の子心のねらるるをそののうとていふなり

どもいれいれら火を附んといふ致ししを意ゆふいすや男女大徳を  
おのし情を何ぞ子信心といふ事や幸しけし事と又縁のふらきを  
いして何とていふなりと云ふことと公儀の縁居を何とていふなり  
近きこといふなりと云ふもいふなりと云ふ事の縁居を何とていふなり  
少りしけ縁のむらより丹筒をかきし事縁がしけ君なりし事  
ことよみし縁居乃情を知さるる知るなり祇ねむくこと縁居  
事何ぞいれをいふと云ふ事なりし事縁居の縁居を何とていふなり  
父母なりし事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事  
法のりいふこといふ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事  
縁居の縁居いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事  
白きもいふ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事  
あひなすきか一の縁居をいふこといふ事いふ事いふ事いふ事  
こと縁居見をいふ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事



十一軍乃時谷中感意もといふ日蓮宗の祖師堂なり  
は其感意もいふ日蓮宗の祖師堂なり  
感意も祖師大并に今日も瑞林の飯ヶいの祖師是之  
一の家をあきり家の文字常在靈就山法華実力一と云  
家之そりに本御お七と十一才学右をの家ありそ延宝四年書  
二月と書くともいふもや神仏の書といふこと  
うををさても今更ゆりといふ事なきや是れ増する法披  
りらど延宝四年五十七天和二と六年の成り十百六年と  
十たふんや何とを見らるるさやうにといふ事と  
ひらひら吉三郎が西言ゆららの及理法中心心いられ  
ぞも村の當ゆり此法を地へ感意も家の家を成りせよと  
命をいふは極く拘束あるに案のとも吉三郎がせし  
まよお遠なる

相言あはれ湯きふけー松竹梅と云ふ事  
実の世教

中心室におわく大いなりとてせんかあく天下の大法  
をいふが今か家法披世と一統小初るあはれい  
用捨てば天下の仕重といふなりと沖老中へ信と法塗  
のうか七火所づりよお免致が成りて天和二年書二月法  
仕重ふ成りりそ長吉之節も同死すてお七二一火所が  
お初りるなり是中心殿の文庫此日記よりいふもあ  
ひたす実説をいひ世とふある人おたすきを先年公の  
法文庫ふ眼をさらしそ勤候の長幼よそん心よあえ  
し左ふいま古講の師よりゆら家ふ懐りをもつて見す  
筆記せしめり

近世江都芸算集卷之三

新林本町白子屋お熊仇名の奇  
を奉水必と云ぬ師の五返りなり

うはくしひる心のむこもの

いふに言のいと深きありし教に地所よりたどりぬり家宿  
の扉をうらまへてきけきとていと能く寝入りて起き出る者  
耶一やせたるくお起しる後女房御く起出く後立  
敷よそ戸を明て入るなりけりいほどを氣に難あ  
して居すぐらゆりしおお後まて情をうやぬ英しきも  
さゆふ心たうていと言にらるるぞく涙をく流す面白  
即面似井内心如教又とおせう始りも何となく意を  
きくくきくくく山直くハ之怒新林本町二年久美  
あまに世を送る白子やなうとて家持角を巻の

何れぞとせしめたる初なる事なり

今和國解をなると云ふは右の場而白のやが恒而之今い  
その地よか解や長き事とて 公儀松蔭の御親式  
御用お勤る者の家と成一と也加賀守公長も此傳記と  
三書林大學院伝亮記しとて是が徳義を解け去りの

忠義傳

右白のやの居る所に一人の娘と名をなして容貌美なりとて  
傾國の格ひしものて多し心をなす者なり二八のまはれも  
とてや年頃よひなびるまはれは山を越しひくもあ  
まこの方あれども世をなれぬの園なりもつら紐の宮のゆき  
との信ふがたしをいづの今いすれまことふ幼學院の  
崔の蒙求を轉り智者の辺のまはれぬをよむとてや朱の  
交ふとの前と被る妓狂言座のこけり可なりとて然るもゆ

芝居乃るをぐう八百をかせあげやお保がいつらなる仕組の  
相云大経師おさんがなすうぬ急流ふうき名所この昔かたを  
おのれが身なりめど伊をなるところのうら氣より平生の所持  
をすてにこそもいひまると母をやのお法とていえる女房の  
をも持たぬかすま〜欲心ね情の斗なりま下居る節ハ  
生けうつけ者も高貴のなれ〜知つて林本買出さぬ人並  
ふとていとも世を〜世帯表向の女房の法とてまうせ直り  
は女房主のうつけを尻は後を御しき身上向をこがまに  
あこ〜月院その家事を扱く物見杜心法いえをいととて  
たも衣敷を〜おざり娘おらふ下女はもろのうら衣服をか  
さ〜せうのり守ふあすの角田川の所をび芝居の見物うら氣  
のせしめおざりの心をも高貴の海をたは是必家を失ふの  
けさ〜いなきとてな〜と仇と〜とてあ〜とて

は女房常をいひ申すを知ぬ者も好く一ツ中義のお法と  
りきりとうやされば娘のふい父親の意よりい母をわのき戒めて  
こそそ志もむらけるようゆる母の身持なればおらまが知れりとの  
そそもむおの好も繁のかしら風俗も昔居の役者をとらる  
どしたはまよりの之味せんのかしら一は事をとりきりれば自  
然と悪く心をくゆるゆをくは是を先姑息の忠とて礼記<sup>三</sup>不  
のいまあふ所ぞうし白子やる代忠八とて忠をましく風流  
して慈めたる忠と高貴の道とくめは忠をましく名代を  
勤く町内もともく渠を侮らるのち一は家のとんこうとて  
こそと申すはつがいつのふどよりかお然と人知ぬぬちりりす  
ぶく川虫のあちりり此契と伝の地も重なるほどふ藤は伝出  
のそれとて思ひをよると威後とて中女の久と申者の持りて  
より好くも終るは夫婦の契約とて神をを頼るは起法<sup>ハ</sup>の

教く五かきりきりい妻父母いあつめひの法り此海の法り  
然中く印より仲人さきく白子を名をさし申すり入らるお然も  
白子よ威後とていふ印ふ男子も持らるる似合の算表をを  
して家の根柢の石すくして富き繁昌り子孫のさうゆくす忠  
をまひしとて白子を主婦くすめらるは市白子を女房が  
幸進家月よりちりちりて身もわくふりりと威後を向ふも  
ふ節もさきく居を忠も書入して借入金も出まられば金子を  
持来す金と算もあはばお候す節と申す仲人を所を  
聞届く大傳馬町を町目地を承承代を金子五百兩持  
来りて算表よりとてそを又印とて申す故くお候  
おらるの又印をいれおらる婚姻よりむとびり娘いさく  
夫婦と約り忠八次をばとならるらふ女久より印  
目が心をあふちりいふちん二たやの伝をなりとて今婚姻乃

新花うらうらと忠に義理せず而命をわたり仕らんや  
らば二親のふ孝のつとむる道も好し又忠にほひ家をた  
りんと例のねをせむをすま好んぐ見當り候を心中事  
の芝居風のふ思案計よそお怪しむたふ了當もたうりきり  
されとも忠にともお徳し一夜のたわの心を安んずるをたれ  
ばと御も業をはせして又四節と並しと好いあはれ先子  
妹の国へ入る歳のむつことを父母もさうとい町内のひろめも  
五仕と是よりして白子や高いせもお徳よらんかうして  
月日をさうきりされども五人もたうし亭をたうらわあ  
りして家内は並ゆきさうだ聲又は節ハ昨今の節や徳  
母あつていつもうしゆしゆの心やまず娘おらまをひら  
に白代忠にともふ家の密通礼法をて下女下男もたう女徳  
て更に人家の交りしゆしゆに代ともハ引負金をして

欠落を返すすもと貴徳をえぬ遠い島路の忠にも聲  
あて好い世女ねい悪ふかひたさうして親方の金徳を多  
けお中白子の身とるも好くさんしゆらうしゆりきり  
らふおあわく白子や持帰るる新花本所乃角を愛愛押  
お徳お究りらうしゆ時もたうら平生の魚を鈍うて女房は道  
白代忠にともふ家の密通のせり同町よか徳を共き出とる者  
是ハ新花本所ざいりしゆの加賀をたふ出とる者のさう年久  
あたましゆてそ好同町を指し候しゆえ徳美の者しゆ  
くし子孫今ふさうえ新徳しゆてそ好子とせのねらうしゆ  
御用さうの御用をしゆしゆ 徳美一人はけか徳や長き徳日頃  
徳しゆ白子の徳しゆかきしゆ 徳美一人しゆとまきれば或時長き徳  
あて白子の女房は白代とお徳して何とぞ徳をうりしゆと  
新しゆしがさんしゆしゆ如意の徳をゆて長き徳二人はむしゆら

おの家の妻の成事うねを助くは結くは家内をさす貴  
拂ふ事事々々御事よひをくくは年又は節を年持事金  
も多くとくひの何とそ左様いふとくひを舞屋の親えくゆ  
てもいふと必貴家持と云おゆくは持又は節も五百とくは大金  
を持事して事事めくは成くはなる事くは事事不右く金六の力  
九るお事とくは分派より不お事不事めくはゆくはり唯くは  
ゆめ娘お態事の質素を中ふ思ひて急夜お毎日をい  
され忠公も陸分と情をせして主人を大切お致し高貴よの  
心をくくはたを何ぞ白子の危めくは事あたる事くは  
版をくくはくくは事くは事今をの同急事の借金をかせる  
乃不事五事たるくは高用の助くはくは目以の念ひたるくは果借  
中なるくは急事貴拂の事くは事くは事くは事くは事くは事  
金子二百を白子のくはくは事くは事くは事くは事くは事  
くは事くは事くは事くは事くは事くは事くは事くは事

うくは事くは事くは事くは事くは事くは事くは事くは事  
速事ふたれくは事くは事くは事くは事くは事くは事くは事  
白子の急事同の事くは事くは事くは事くは事くは事くは事  
くは事くは事くは事くは事くは事くは事くは事くは事  
まけくは事くは事くは事くは事くは事くは事くは事くは事  
をくは事くは事くは事くは事くは事くは事くは事くは事  
を用ひずくは事くは事くは事くは事くは事くは事くは事



近世の朝武軍集巻之四

白子屋一族亡失乃辨

その以辨師の録白子

きつり〜あるは〜をを志守りたる

はりの心ハ炮の括也ハ恒虫のつまらしき声をおりたるは〜  
やせき〜すの義教の床のうきおし〜天のたぐる災ハ  
さ〜自らたる災ハ〜聖人のゆ〜  
〜人ハこのふする欲心ハ何ぞ天の所擲〜是をゆる  
す〜白子屋の家門は〜又白子屋をいつ〜  
〜事のおらま母の常〜是を〜返出さん〜  
〜表向より離縁と〜持家の五百両の金を度〜  
〜退さんと〜み〜  
〜代の忠ハが女計のよ〜

白子屋



江戸をいそぎに殺して志まひ病死とせらるるを飾りうんが親を  
欺らんそこの忠はとあたま主婦は成る業人と企きること思  
られ母親の常も娘を便とせむに心まひ又ここが身持のつ  
まにむとめのお義をいさうする事なれどりきりお母の  
又江戸とお徳が中の一男子を生けとてけりも偏ふる代  
忠八が胤なりと母も合意して世にけりもけりも乃家内皆  
人面畜生ともいふをうんぬんはくして或時又江戸が  
羽級の内の中へ大毒をさい見えし是をそごわけと一口喰ふと  
世に死するふの大秘法をぞとあひり又江戸もあくるす唯  
今初より今初より江戸の目録まる間のとて之をふ自子や人の  
長介といふ者は毒殺の事か一耳く入らん大さふおとらき  
こそといふや解なる人このお存う人いこもわくも我初々の経  
ひ会事のみ司とれはは難哉もわかぬとておひりは

又江戸湯ふひ〜とそ何〜川つひ〜湯を〜来ていそ〜  
〜きつらぬ〜ゆ〜何〜喰事〜かま〜とぞ〜  
〜きれば又江戸何〜とそ〜ち〜やと心〜  
〜と〜長介いそ〜を〜又江戸も用〜  
〜日頃怨をなる加賀屋長を〜あり右と怨を〜  
〜いれい長を出の娘使たる人又江戸を宥め〜  
〜の妻お徳も〜余は〜長を出吳見を加〜  
〜一向い〜又江戸母子の心〜  
〜よ〜離縁〜持余〜  
〜思〜所〜持余〜  
〜す〜是〜又〜  
〜たり〜長〜は〜  
〜に〜  
〜と〜

附て離縁をすまより介所をうへむとどおひより此付は金銭の  
かぎを長き傳へおぼしかり今新枝本所長き傳持けりその頃  
長き傳のよひ百ちとせせらりて知つ男也風流のその子今初年乃  
長き傳の申す傳へおぼしかりとせ傳へ伝へるるれば長き傳の申す  
詳くことおぼし金子あり又何れをせしなば長き傳を除くをさふ  
悪事し傳へおぼし事い天の悪むの常なるゆかりそ長き傳を法を  
ほろと即妻は伝へて代忠八と伝へるといふこと又何れを金子  
傳へるるて離縁して金子をばけり方の要なりといふ事なり  
とて又いふこととて事をおぼしし下女の久といふ者と申合ふこと  
は同くいふ家小腰えの菊と云ふ女と云ふ事ありてその方いふ人  
又何れを傳へるるてあつて入又何れを傳へるるてあつて判りて伝へられ  
と左伝へりてせしあつて金子伝へるるてあつて伝へるといふ事  
法にふりてとすうとすうとすうとすうとすうとすうとすうと

女衣後金銀をくらむといひいふ心まゝいふふもかか伝へるるほど  
事いひてすうとすうとすうとすうとすうとすうとすうとすうと  
きくよかか伝へるるてあつて又何れを傳へるるてあつていひて又  
何れを傳へるるてあつてせせらりてあつて悪むとすうとすうと  
持来の金をとらしては伝へるるてあつて是れは趣向といふこと  
又何れを傳へるるてあつては伝へるるてあつていふこととすうと  
思ひ入といふ事いふも伝へるるてあつてせせらりてあつていひて  
形て下女の菊と云ふ人又何れを傳へるるてあつてあつていひて  
のどろびのあつてをかか伝へるるてあつて又何れを傳へるるて  
あつてあつていふこととすうとすうとすうとすうとすうとすうと  
いひていふ事いふて天罪何れかあつていふこととすうとすうと  
菊をそとていふ人長き傳をいふ事いふ町内惣合家をいふ事  
如是の仕合是れとすうとすうとすうとすうとすうとすうとすうと

の版をくく存一のまゝ之を委細に  
以儀を申出さるる  
りたること名を役人へ申せり左止事なく町を以所又申す并  
一家の者どもは土居の細を言と一箇を思を申上るる此心  
を多き時のまのり大星越前も忠相とて此事を申せり是れ  
大星の流石の越前も  
あるまゝの勢を申すや同所か賀や長き宿いふ一内院の  
うい見せしとも又曰即親類うつく場忌致されははあはし  
とお蔵は是享保十二年を十月七日は是れ  
お女子又曰即はは拾九第母常は拾九第お熊二十三才下女  
十八第祓は古今の趣違なりと 此の日記よきを拾ひて  
何々々々

御仕直しく申書付たて通

又曰即妻  
ら  
は者義子代忠八と致家通不届  
お浪家獄のり考也

忠八  
は者義子代忠八と致家通不届  
お浪家獄のり考也

名三郎巾女

久

は若家名三郎聲 若子又曰節く 疵付く 極と傍妻の  
菊くすめの上又曰く妻態く 代忠八意通の候  
取次しつて 若子届て 町中引りしと 死罪と  
す甲寅の

名三郎巾女

きく

は若家名三郎声 若子又曰節く 疵付く 極と傍妻の  
菊くすめの上又曰く妻態く 代忠八意通の候  
取次しつて 若子届て 町中引りしと 死罪と  
す甲寅の

名三郎妻

法

右常義若子又曰く 菊底付く 常事母子  
の美くしむを 悪心くす 常事 露 露 依く 遠 依 下 付 公  
但事 師 とも 宰 人 寄 たり

又曰節若父

名三郎

若子又曰節く 菊底付く 若子 又曰節 極と傍妻の  
妻娘 若子 代忠 八意通 候 取次 死罪 甲寅 乙卯

名三郎若子

又曰節

同人子代  
清玄備

同人中人  
責八

同  
長介

同  
権介

同  
伴介

いさよも御様母さし

右御書付と用番中松平左を御監殿大因  
越前より湯後とてそと頭め

相白り

まことふも名も富生のらゆをらや  
不義ふらりりーむの月乃痛  
白子やをかうらふめをやこうら  
知算をくらさんうこまなりきり  
身も婦人あつるも不仁母の法  
けりり理ふそのうこまなり

世時お能う川とーよあふに衣袋法くふ出きて白雲塔中若  
うさうーとふ黄八丈の山袖を著り纏よららむて馬小宗あふ

すいしやうの珠投をうけよ法念院の普門ぶをこめくまうらな  
能滅諸有苦假使興害意推落大火坑念彼觀音力と唱て引  
渡さんらうらやかあるとき觀世音行とてをらひまふら唯  
のめありうふのと宣ひし一年生人こまことさうしてその由事と  
はさま人の妻子羨ふ尖の大神にお態が引かるとさうしてうらとてい  
嫌ひ尚せある者稀なり是大きあるひが事なり八丈の目おき織物  
なり好をお態ようのて是を控をらんや帰しうぬさたふふ家の  
女さるる服なれがとてささふ心かしの自ふもとづあつたふ福  
好人うつてあむべき事也と云

之浦抱遊女房雲々傳

晋 三ノ角 勺ノリ

京町の猫 ころひり 揚屋町

ひの美の氣とて猫かふとらり 猫サカレ 猫コカレ ねこをこにうら美の氣

入て於す京町の猫とら遊女をねら見とてするすがこといふを  
とときくとも今其角流の雄踏て六人を高敷比しとて  
いふ風よりくすとて致さずせういふ縁の頃い大ま悟子の京町三浦  
の女帝の揚屋入の付虎は福をいぶとせとてあひくふ首玉を付て  
籠籠しとらすぐの遊女猫をとてらとびる中よりとて揚屋  
入をさる事をとて後のすぐとて京町のねらの揚屋へをらと風折  
ひひとてとらとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて  
根えい三浦をけちとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて  
理とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて  
たりの元福七八の頃より十二三年くわつて三代はとてとてとてとて  
たりの

を年板本の山列は女をうけよ法念院の普門ぶをこめくまうらな  
涙をうけとてとてとてとて

けうす雲の半生之毛の小猫をかゆししういちりの首を  
を入金の程を骨を籠籠き後がそ頭の人へのやすきふ  
女との女の娘もかゆるまはくんとす家ことそれの中よ  
うす雲ふくくたふきね一はをそ物々例をそあれす物  
痛ふふをけ時もあくうどう春の夜の乃々福の妻を声  
あもうれおずふえをそあれす神妙よいとあふくくく  
悦びな成く籠籠ききり大山のあかきやけ福を物も  
例をそあれすしういちりの圃の田ふ入くくあふきこん  
ゆく物にそ是非をそあれす圃もはれはくくそ頭  
いひまゆーうき名をそあれすいひまゆいめくもり猫の陰敷よ  
くそも魔をそあれすもこのとそ雲ふより内容色うううく  
猫乃見えくたふらんと一人云出すとそ後大勢のゆわく  
さうす雲の福も見え入らまてりといひまゆす圃のたや

く耳ふくく籠籠きり見えくくあふよりと物く物  
まかあうすあまう猫を籠籠きあふ事なれといひそ雲  
今のおうういふあそくくあひ籠籠きたてりなれとも  
猫いごうす雲をそあれすいひまゆいめくもり猫の陰敷よ  
あふゆきふたふきさけびあ杖のゆりも薄をそあれす  
を籠籠き事をそあれすいひまゆい圃の大山のあかきやけ  
けうす雲ふくくたふきね一はをそ物々例をそあれす物  
痛ふふをけ時もあくうどう春の夜の乃々福の妻を声  
あもうれおずふえをそあれす神妙よいとあふくくく  
悦びな成く籠籠ききり大山のあかきやけ福を物も  
例をそあれすしういちりの圃の田ふ入くくあふきこん  
ゆく物にそ是非をそあれす圃もはれはくくそ頭  
いひまゆーうき名をそあれすいひまゆいめくもり猫の陰敷よ  
くそも魔をそあれすもこのとそ雲ふより内容色うううく  
猫乃見えくたふらんと一人云出すとそ後大勢のゆわく  
さうす雲の福も見え入らまてりといひまゆす圃のたや

首の奥より方におぼろきと厠の下すすのふたきなる蛇乃  
は居して居り〜に蛇の件は福の改吟ひ背て地を  
くひ殺して居り人々を泣かして自を哀れ感〜  
是は地の厠より後で活きを見〜を知らばごたさ  
猫の心を背忠なる猫を殺〜るに甚辛忍なり日頃寵  
毫〜あふ猫の厚恩を感〜てお世をさ〜た心根をさ  
すは殺せし事の残念〜と〜いづも感を得〜り居  
雲の程も不便のゆ〜〜目を流〜はるる猫のわら道場  
にあつて猫塚と云ふ是より〜と猫をさ〜ひの柱女のま〜猫を  
飼養し拘めておぼろき〜おぼろき風俗なりなり

山本の勝山の傳

京町二丁目山本介右衛門抱子猫の〜と云柱女なり是はらんちや女御なれ

とも心い〜おぼろき道ふか〜れ〜情〜  
手頃の御師カマズ風雲の匂なり

産不婦の離れ〜法〜と云なり

はるの或時三月とこのおぼろき勝山の産後を〜た離れの洞  
五並る〜と〜離れの女と生後〜去人のさ〜嫁〜子をま  
きてその子の長傳り〜を〜た故〜子をま〜をさる女〜  
子をま〜をさる世の初乃才〜と寸離ひ〜をさる〜  
初めて小き〜を〜の傾城〜を〜といひ〜此者の  
離れ〜法〜事を〜た〜を〜雅む宣ありは勝の柱女  
た〜を〜を〜と〜を〜を〜佛を信〜  
を〜を〜を〜を〜を〜を〜を〜を〜を〜  
法〜女あり〜を〜を〜を〜を〜を〜を〜を〜を〜  
を〜を〜を〜を〜を〜を〜を〜を〜を〜を〜



法皇太子の室も是をまたび今も士農工商の女房娘かつま  
といふ聲を用ひる事たりそ須官徳御を以て甲斐元仁集とを  
人此御心の多し金銀を費して綾羅乃山を築き金満の港を  
かゝる或侍朝鮮國の徳ひより甚押底なる名を金銀の横を  
しに銀の細を以て流梅と稱するも筑前の中へ入る甲斐の元  
送り是は秘愛をたより大石を家のふも入る子細をてま  
仍の勢ひはまうせて得るなりそ是れとて流りきり船の  
是を亦く只い收回のしるしと見えそは存も竜をわが座  
敷に持まりて龍中のまふ向ひしり

ひよきもの〜女の形の時金銀の差ふ入る今も龍を以  
て天信は合者果報のぞ〜なまといふ人いふんども我  
女ごころをひとりおぼり世帯のむらつをいふ鳥のつらま  
あ〜い〜り〜る〜に辛を強る牙の竜のち乃〜〜〜〜綾

龍を師といふ美にきらをさる〜川行の〜〜〜〜  
か〜〜〜彼王照君の故國の質と成七杯美室い〜〜〜  
心まう勢然後世のき〜花の勢も〜鬼界の〜  
あつ〜〜〜つらつら龍のち〜〜世帯の龍金銀をい  
と〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜  
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

蓋乃中より彼をを〜〜〜〜〜〜〜〜〜  
い〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜  
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

奥州の傳

晋子の集

曉の反吐いとあつらひ〜〜〜

是は白の其角名をさしなり白の心子細あり表をりしすま  
はなす唯後物き息のき京の曉の酒の名跡さする解とんて  
可ありそんはけり内院とる子細いし戸所若名をこれ真ありと  
いふ傾城と頂名歌高きりや座配心の色名余ありぬる  
に去りしを勅といひ情をさるゝあつてちうけさうしそ親  
のちをさるゝ初人きあてもむ極大せりしと馴染の客来ても初  
よりし客を貫りぬ事さうしにさうし一極のまとちをさう佛と  
さうしと女房の貞実を法りて地心を傾きすそ客を介抱して  
いうちたるふ男とても是を疎略す家とさうし情くゆ難波の夕  
暮の世道の情知りとせしとたうしは奥列のたうしとせしとせり  
或は初倉の室の酒をさうして大さ酔席をさう介抱幾年を訓  
女房もたうしとるゝとてさう暁さうと大吐却せしを先さひさる  
知しせずとて奥列ひとりして見まうちのいそをいりりきりさ

客もたうしとる男とて女の情を通さるゝとあつてさうしとせしとせり  
なり中々わが全盛の女とてわがわがわがしすなまやうと  
きりしとてさうしとるゝとてさうしとるゝとてさうしとるゝと  
極よしとてさうしとるゝとてさうしとるゝとてさうしとるゝと  
極よしとてさうしとるゝとてさうしとるゝとてさうしとるゝと  
の名向之ぬい奥列が持せりさうしとるゝとてさうしとるゝと  
め

てきんといつらうな

と書の中の所擧を所くもゆとそれ人の紋にさう身の解をら  
うし解をさうしとてさうしとるゝとてさうしとるゝとてさうしとるゝと  
らうしとるゝとてさうしとるゝとてさうしとるゝとてさうしとるゝと  
さうしとるゝとてさうしとるゝとてさうしとるゝとてさうしとるゝと  
たうしとるゝと

葛葉玉琴の傳

ちり紙のむのうり

かき流の雲の花より勝つて

お終の孤松のまき不ハ勝花の花よりもかたらのぬきその徳を  
稱してのうこそ松の位よりわきし心ハ舞より鐘のわきさ  
の松ふかゝ思はるまや玉琴といはれ女ハ心をせ誠とて情ふ  
くも是こあらうとくもまきはるひ並ふうさちうく奇麗とて  
くりとあもかゝををさずてまのま流は相いひれ女わらずま頂世  
よふ啼くくるとは鏡の柄の中へ極ナギのまをい入る事をは玉琴う  
初くしより今をさう方の女中もまの鏡のうらうのくこ極のま  
を入女のたりあまのうらうらり玉琴の在女のたひはと花  
相かたが河の神くまきくたがうらあく麻呂をうい川をうま  
流播流ハ誠をうのすまのあはれ女ハ魂同あふり相とつて

あゝとまのちりきと神は約する起流の極のまはまの夏別  
伊豆大権現の神あまをまきし伊豆箱根の権現ハ起流せい  
しのもり神はまあしてちひをまき神ことゆりてあかうら  
とま世も琴さうんの幸は終ままの事とま親のうら  
いり醫者藤子とまも叶はずて冥途の客とま生年  
二十五果たり竹婦人が水てりしとま流たりを依て親く茶  
州の音曲してそねを吊ふさんかま文句ハ廿五結の玉琴の玉  
琴とも書り誠とま喜ふうま女たりらると

瀬川流考の傳

元文の年且此は起波のうとま

まの月の女歌何とま乃る言

是年末のなむと山しては年のかくもまくれすす鏡とま

秋の心ふかたしひ飯子梁惠王羊をひて牛ふくすを仁  
考のこ業を背の女形なすふあさういふ成るぞ今一  
うを何福とゆびお集つば情なうもかたうかかん祇  
女形をど年ををくむ者らうまうとあは我が員員の後  
考のこ業を背の女形なすふあさういふ成るぞ今一  
なり超波が向の情意味うきふこそかふらあきれ新  
形をうきふはさゆれゆりかきまをを見探はさうき  
二匹の兎のあのおうと教をうめ初めとりてふあや  
浮名をゆやお保の百や乃お七乃切を焼んで大いその虎  
の殺すう一をを殺してををけりて女の白浪女形人の百  
とをてをうきふはさゆれゆりかきまをを見探はさうき  
ををうきふはさゆれゆりかきまをを見探はさうき  
うかうのして殺すて名人こと元実お新とるん能く乃達人

大徳より平生をきりてなぬどんばなまううて女形  
あど亂れ乃大事なることいりるるうて古澤村山信次う大  
和より信隆もふくかき就よりわく今日一日かき電ふゆき  
血のなが起りしこととて一人をうきふはさゆれゆりか  
れを称し祇は女形の信ふくこととて殺考夫今見こりな  
りりうきまあり女形の離るるお萩中古花う妻始のう今  
三月よりあまの女形をいたををてあま事と平生の女形を  
事なすうて信隆もふくかき就よりわく今日一日かき電ふ  
男なすい自然と陽系れうんをふ心出さふ成物ぞう  
考のこ業を背の女形なすふあさういふ成るぞ今一

女うの女の氣とさうて花名川  
林の叔中男の氣もわく  
花名川がうりやこき事と女の氣と成てはく





こもつる君のましましたるに彼をふらに泣けりす人相也の事と  
てもう後々よは縁をせ然まに文とてと書けり女のみ秀吉  
公は後下紀の山城の國浪村の住人瀬川宗女  
と云侍を就造寺の家は之今夜出陣おは宗女婚姻とめて  
三果出陣しつゝその妻菊といふ女も夕名残を惜み程の神よ  
すがりわらぬといふ事すぐせのえりやうん夫婦と成り  
しからす新粒比翼を程の枝をれて西の遠く國へ川を  
越さる事しりも是うや長きわらうと思つてを切て宗女  
かりし事とて内家存を國を名をそとふも同じく屋のそ  
ちす宗の婿よ志す然自女のまも娘しつゝ瀬川宗女名残  
きしとて出陣し今此浪中お居りり秀吉の面多し衣とて宗女  
宗海申敷の英士を瀬川一人居候とて敵を亡す事の高きを  
先よもとてかゞんは悲路のうらま情を浪中をゆりて給

つ後々夫婦を永く契りせんはもろの情仁惠なると後瀬川  
宗女もゆいとゆわられ浪村へゆりて宗女ゆりて女房きつゝ小對  
面しつゝ花の立立とて娘しつゝ夫婦まじりむらまじり浪村  
にそめつゝ悲路の情知る中と法入を浪中をいひもろやひ  
四死を宗海の仙鶴知りて瀬川宗女ときつゝ夫婦れ中は男女  
の情のふつとていなり女房をいひやうとていささうとて赤  
ずんばなるまじりてとて西谷吉次浪村の生れなれば幸とて  
浪村や瀬川と名をきりて女房の菊とてを名をりて菊とてと  
名宗とてと也誠とて代の名人の女とて一生の誓許の世と板  
切りりの形とて死せむ者も唯田是院の瀬川宗女 幸と 結託を託  
して好人の思ひを求むとて

芳乃波春水傳

とて成るの句なり

郭とちうくや五人のらやめ州

けりい継借二十九ヶ条の大事なりとて蕉門の傳授とする  
五人のらやめちうくと只延くして五人もらする當り一通り  
しして直ぐ一併為の心はほくきんといふ初音ゆり  
人毎りまぢびてさう成るをさう一音を吹く心なり  
心たのまは事をあふれそそや夜ふ初音心地して八子公事を  
ゆきもいつもきりかんとて堀川の傳心いさく夜よめりしん  
いはくきんいつも初音の心地をすくと讀き一初音の  
傳心と美名なりけりいはくはくきんたうくと初音面白くいつ  
もけりぬ心をさう一五文字の五人の人るれ長テたうればけりや  
ゆきもけりぬきりかんとて古けりやの慶慶のりかんとてけりはくきん  
乃酒もけりやめは条もてや一の是なりけり堀川辺こそけりけり

のけりけりけりやめ初音の以意タ意葉やとて寺院を失ひ破戒  
して陸路なりとてやけり家を堀川の傳心初音の傳心とて  
てて芭蕉のさうれは初音といふまじけりけりけりけりけり  
ちうくと初音の事けりやめは初音なりけりけりけりけりけり  
今この初音授とす礼道成ち初音も悉く是處一通りけりけり  
たうとけりけりけりけり今五十甲又ハ崎之助中興けりやめは  
乃酒も初音のうらとてをすも是の初音初音とて初音の  
遠く事ごとく一五年古けりやめは初音海士のまじりけりけり  
初音をせしけりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけり  
初音すつとて初音の中ケ下見も初音も初音といふ初音いけり  
初音をとて初音をけりけりけりけりけりけりけりけりけりけり  
まじり初音とてけりけりけりけりけりけりけりけりけりけり  
つす初音とて初音をけりけりけりけりけりけりけりけりけり



若くは... 九歳の... 花も... 地盤... 月... 大... 事... 川... 志... 葬... の... 花... 見... を... の... 中...  
若くは... 九歳の... 花も... 地盤... 月... 大... 事... 川... 志... 葬... の... 花... 見... を... の... 中...  
若くは... 九歳の... 花も... 地盤... 月... 大... 事... 川... 志... 葬... の... 花... 見... を... の... 中...

風文... 入... め... ば... を... 動... 是... 月... 室...  
風文... 入... め... ば... を... 動... 是... 月... 室...  
風文... 入... め... ば... を... 動... 是... 月... 室...

いどもまゝかゝるお姫様とておぼろの姫とまゝ人の面を  
ほめてもあつた目うらひしとて山嶽の馬場子とて  
古美水中奥の島十郎又を御座り今とての地ある  
古今とまゝとて右平井平右衛門と称するは是れは実  
の功者とて人まゝ

古が長澤路乃并

室井晋子が於相の子とて集り

山崎もてしは福いゝとて母を夫婦はを

世の川中村古七郎京郡山下京右衛門座とてとて女房  
法をふ趣きりうがとて願が長わたり乃名物男とて坂田古  
左十郎山下京右衛門大和心とて大和の似城買の又事師の  
命たりは古長をせとてより又事師の目のまゝとてせり

其角も心をかゝる男を妻をこゝろひ道中とてるは在るの  
うのまのたとて女をがうとてりりうらうの山をのうらうも  
も人のうらうとていゝ物師の昔れとてふらうとて山崎の  
乃福とてまゝとてやわらふらとての晋子が風雅とて何と  
いゝりりんおりゝからず智者も千とて一の夫のとてり  
今一例の京を乃ねとてり

山下が七三郎を法をてとて

し福つてとて馬のつとて

といひつれとてお姫様とての二のかりり傾城流るはねとて  
の殺つてとてせん奥別が記法を大鐘とてるはねとて大さ  
る山のねとてえ祖あり松子流の羽織をぬのては古り投  
はきとて京碗のふらうとてをて其をてとてとてモギ  
とてのやうとて事ふ京右の老初とて江戸を慕ふ事ふは誠ふ

此處地を物男あり天子太平の義みかゝるふしづの老太ふの家  
り生れしや幸平治世の奇跡ありとする近幸市菫の名譽  
を接賜ふはさうして江戸の元を御軍の印ふさうせまうと堪  
關東の家えさんい正徳の姑少長京都くせまる時より道中  
海川橋さうしての月幸平自由せんなるまは須江龍舟のえん  
よか荻山左衛門と云すいまやう人まうりけ人の背を貫く刀  
をさうして竹のとうしやうてやまをさうして先ハ殺者と知す者  
たうりしと云地家やまやういつきの後一まをさらんやうは  
と云後一まの老とも能知つておとどめ今く竹をさうして地家  
まじ武士の背をかりてある殺敵殺老の上さりせりし  
うさびなうと押とめそのけりやうまうさうさうさうさ  
是れが長尾く云候とていうも柔い殺老にゆきしめ  
とそまうくの酒着をさうのへ後世のへく悪うぬまひま

くの後をきひるれ和後して通りさうして時お長を初め  
考よ向してさうま三舟各極くゆれや一幸事とて押舟ゆり  
中村傳九郎とて松田との殺老ありゆふ是も拙老ゆりさう  
方の別着を貫く武士とてぬてありゆふは傳九郎ハ拙老と違ひ  
おさうざり考もて者おさうめをぬてもめつさ殺老ありとてや  
傳九郎とていゆい必定なりとてさうはゆれ免殺敵ありと  
ちてお長いときをさうの方を越りり件の所の老は太は酒を  
のこ殺もあつてさうりひさしとて傳九郎がまうり又と海録にせん  
とま福をわく老を人百連て旅帳東の武士旦那の殺着をさうせ  
さういりりりる船をわさあさんくと唱る所の者さうりさうい  
何のことなるぞおのれうづき殺老とておさういさういさうり  
船を武士並きのしちとさんづきのありられば武士太きた後を  
ますいさんこりおめとてさうり福のまうり刀ふるをさうを

る者所の者大勢集りてさいざんに七二がやちりて色りきり  
おちりてきりて指す所のよせよとて刀を奪ひいりお擲りたり  
ねて後所の長どもをよび集りての士りいふ衣の極  
家何系とや者之主用とて固え濠別丸飛くをりたり地を  
大勢を是理ふその根藉をうに致しりて早速改ん  
まててはま根を乳ゆすしりて及申御前結集は見えり  
母お遺事極家の武士あり候よ大勢集りてをすり  
いり候とて所の名合証ををいひ戻り及申まで附系  
り候と申候りりて是は申村が長が孫田をりて一言を結  
し家初の根を何とあり候しりて面白きなり

不赦名獲を弟履おの弁

不赦名獲と云程之市川牛牛が始る仕也 雲に橋妻の

衣裳を悪りり市人乃排遣のぬめりふれまき集りて

橋妻のさうまりり不赦の関

古代の好まの衣裳の控指自然と雅なり市村何れおのふ  
は悪りり行方かたりなり小姓吉三の男なりとも寺小姓の  
女もいりいりいりいりいりいりいりいりいりいりいりいり  
のといひ情をよめる理源院が頼お初の黒の地小とて見  
付り候とていりいりいりいりいりいりいりいりいりいり  
向にわりの能指あり家お初お初お初お初お初お初お初  
ある是好よこそ及弟のさうりりりりりりりりりりりりりり  
人多りりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり  
を順浪人ありしが不赦名獲の何とて強良院のさうりりりり  
んとりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり  
東心殿弟お初お初お初お初お初お初お初お初お初お初

少く東心のほろろの身持のりしきさつとある程さうしてそのちりぬ  
階の文句は名前の女房子がそまよらうねくもななく海宴  
控無徳見物と身ををれ礼一女の居といらうと云ふ人言はまとい  
こねこの事ことに赤松とを敵と徳徳と命どしてけを報さる  
心いたりの後すいひうまひいよたうと徳徳を志せうい後押の扱  
のこを目ふうをえれとやらけりてゆくれば切落とてきく不敵  
扱者馬の母意の後をのこしてきめらうとく如けりてことをいれ  
七君のゆゆゆを先ふ事のはきりよよ君とづうのらうとけり  
巨死すとの由文とをの程そのいしきとまんと拜者といひ  
よらんをたれいひいけりやまてあぢい程あまの程籍とくごめに  
けりていさき急のうへの恥辱と志せうい見合と一程をひてからを  
わざと姉といすりよりてか一のめをを知らして事よせんとい  
たれい指るところへ傳九郎大力をいしてけり事のはかちた力の

らざり切落のうこか一高とて不敵扱者馬の武士のけりま  
程さう力を何とてけりてくるぞ不敵者のごうとわざりけり  
傳九郎とてんでかゝる居合の者ども是を押しんとさるふまて抛  
のけ実とづいえよ大力丈丈乃扱者馬の向ふ志いごらんよらん  
と力を扱て追懸りて傳九郎を始一層の者ともいんは追入りて  
奔着い之階へ逃くる不敵いすうは追懸る二階よりいよめて  
追行すてふら子孫とてんとする時を陣の程を改む古花井大  
二部改む味も飛て来り是さみけの由度之馬の清武家方  
の大切なるいさしあそんめらる者き切をきめらういばそ力か  
由度いのおまま由度まうり傳九郎いさや逃く拙者のさゆね  
かにすや成ゆ力とてまめりい高いおうとてこれどもうなま  
通りあれはゆ力いけりいけりい是まてすや成と女二部い  
いさしを履を抛ゆいさけりいそれよて由ねらうといさしを延で

何らわいて居る所が別今相違流系の名履赤のありと  
成り右を履ふと三節ありし切る所を破は是を穿たり  
も作らるるいしと件の名履をとつて花井と三節をん  
は赤擲して其のりたり是めて其場の漸り信九節先を  
のりいれ三節が勇氣よりのたりのけ事を是居る流系  
りやありいらん不破何とぞ名履を赤通三節をねえに  
細すなりと古く長が名履屋山三節山三節と云ふと古く年元祖  
不破は左馬云々と云ふと名履を赤を赤を赤を  
をりたり是れよりねえと名履を赤を赤を赤を  
いふ破名古屋の州履赤のねえたり

山中平九郎鬼女の辨

元禄乃翁心風のあはれ

船のたりの帆とある風のまを伝ふか

いさとりし生る老人のるの痛も其の痛も其の痛も其の痛も  
して涙をわらふこと造化乃とる所なりといふも言  
後世を信じて佛とて廿世と三十二お八十種とていふも  
家も高生修羅のかつ化を現せよとていふも言  
れい多年の心懸の行法よる事といふ性より人の生るかの  
普賢のまは法然の生る智至の對面一目連の三光をを  
梅よやどしとて星りりの毒と今にいふ是も人の妙の上を  
介のあつたつて今流る者もその業の妙を傳へて人の  
自然と不思議のまをいふとていふも言  
ともいふとていふも言  
あつて山中平九郎の死を伝へて其の事の上なる  
後世とて悪役の名人を鬼女怨美とていふも言

是れ格別傳授の教のらは五徳とて山中一流の傳と寺今明鑑  
は徳傳く美る古室を將監が道成寺の徳り入おの徳ふ  
花やちちらんといほひ多れば立あけし格の花いつくともた  
ふり身つては前巻一面し一落死の危と成らうとあり格  
身のとるゝ如形之神流の大坪氏の馬の一流の元祖と成り付  
馬よあての氣をい人言たれい登功の上知るわえはさう馬  
の氣ををわすしといふの心を弁てくくは深のりく  
信といはし徳ましといひ付るふあひも勢を神といひの  
大坪一馬と姿を化して馬の心をわす後又人言よ立あけし  
た馬の氣をを能弁てり依り神流と名付大坪がうち  
鞍をば神流と名付く今も馬に利と事とありり古代也  
よ名人と云妙をわすといひ如世事あり初お妓の登とをよむ  
この上るふは格の事多し山中平九郎の或時我家の二階

よりて徳ふむいし前巻格の五徳の教を見しま  
かして徳らんかうしといふらんやと眼をよせ口をひ  
きつてとて指をし二夕時斗考くわしと是れと格をよ  
徳と鏡をよふわたりありり五徳の身振をす  
あつち中が女房のやう亭をよ用りたりとてさうとをせり  
さうよ右の身振を見てまといふと一糸すのしこりやと  
澄子よりさうとて格を徳死しとて山中の女房の氣を  
失しといふかまらず天地をわしとてわしとてわしとて  
身よ入り現世の事とて如世況や他人の見物をわしとて  
介満りせしといふ後女房もえのさうとて心付くす  
あつちとてやされが妻を角田川とて格をよ牛の津あとい  
悪女とわく右のさうとて徳をわたりれしと長とて徳を  
つと宮傳傳言といふ川をわしといふは女房の徳死し





子細を尋らばねむもあつし家後考の何やうと牛年を恨む  
まとも見てもあぬをひそくはかり持てふまゝとてし教へり  
是ふ思後の大変以の介し一因章中一書こそ存  
るるくまはる痛き事津陰儀をさるれども唯平白恨の事  
まゝとて斗まて何し白状ももふ及津制法をまは解死入  
と蔵津は並お冊りのそ違恨とまははまはつとの介方持ま  
しかるべら家ふ道いんさなす一室もねらるこ想り人とな  
居りしはま伯母一人りしをねらふの伯母と女は淫も事  
世る隣家のあつ人多し一川やうき名のあつせましく介  
すまゝし一書をねらし一のまゝしそ書もやまゝしあつても  
粒もまんあのみりわつて宿因の業とやいんは書牛牛  
氣の毒よあつして何の付ねををさるふまゝし思後しこは  
をいひせし人面歎心といはまきたるるまゝし一介もあつても

己の急ぎ思ひもまらざる一日頃思ふ事の事かまらばこそかく  
は美見よあつてとまゝ思ふしきんねのねらも屈伏して何やま  
入てこそく己の急ぎ思ふもまらざるとうけがいらる人知らば伯  
母も新に居ては世のあつてまらざるあつて増減しぢり  
ぢりとして二人の中をいさけて牛年一件の伯母をいさふ  
義の通路を切らせ通るまらざるまらざるまらざるまらざる  
いさかゝる急縁もや喜ん思ひ切し耕なんとも同院のねら  
測らるる思ひの深く念思ひて芥の五かゝり一おもあつたり  
あつて痛のうらなうもはまらざる牛年法をいさかゝるまら  
婦もまらる心中も急縁乃道いせのなる物といへども是の畜生  
乃のこゝれとれより急縁のなるまらざるまらざるまらざる  
件の女を似合の方縁も有るかまらる中を遠さるんとて牛  
二まま思ひしそ後女を二味縁し控はるると云者の方事

くれり控は節い牛牛を親方より金子を服おまぐくれら  
い賞ひて嫁娶しそ後渠がらるは女下をとりけりし後  
松山不義のうき名もたのづからいひやうり是牛牛がまの信  
よりわたり祿は善好法師が友とすに能く友とすりお知る友  
と六世の人のを友とする時必不義し一處いらすと六世の事を  
わいあやうかして年月を強らるが松山がふね跡いままは  
びしと渠一とせ市村及び松山と候く詰り申しあを抱るは件之三  
味徳川控は節を市村彦く抱い詰り渠がらるは六世と  
心易しと世話よとえ松山火の付申すといふも少く件は女房  
とまじし始のころふ家密通ふおびりりまは塚町お焼  
て多後志乃山をくも焼失しと和泉所をの松山が居を  
此よりせんばまじし一故節毎控は節が女房のわけをせんば松山  
がうとありあはよおわくありしすのふ家をせんばうりは隻

牛牛のうき控は節のいしと者もまは親意すはは好らる  
と見限り不道やとま実を秘極る事あり今牛牛は  
日々の道をく他はうらまの者制する人のたのめ世のそ  
も人のうきまじしと不道人と候面人のうしとい  
し心は口はよおとたり今牛牛が方よとままじし一将もま  
方へは母子ともにくんが方お言へりうりふとまは牛牛は年生  
るども親意の情のうきと他人の心見をも能くならしむ  
大勢のあはつりそ菓子おのおまのうきとらるは山見の  
うき列きたるうきと牛牛が例のうきもまはむか  
おる是をこのうきとて金山の布袋和尚を見るとうきと  
是を戸前り識し山見のうきとておなじうきとらるは  
してすたのをあらが布袋のうき親意とらと見しと牛  
が心の直なる事おまをんあうりまは右樂をうきと山見

大勢の通り甘味りの三階上の口と大勢の子ども送りあり  
りりりやそと女牛は袂く菓子を入て落こくせしと怪ぢり  
りてあををよのしとせり或付ゆり件のうしとせしとて  
子休りんも菓子を入てあしとせしとせしとせしとせし  
居る権五郎が件あり女牛の子ともお隔ていりりりりり  
ども松山がふきをあしとせしとせしとせしとせしとせし  
つていふ思ひなをいりりりりりりりりりりりりりりり  
りりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり  
が改まゆりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり  
親仁よとせしとせしとせしとせしとせしとせしとせし  
持たせしとせしとせしとせしとせしとせしとせしとせし  
りりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり  
次郎が事ありりりりりりりりりりりりりりりりりりり

ふん情事及びの金席りりりりりりりりりりりりりりり  
しと毎夜被がなる和厚をゆる事の曾まよと世送恨よ  
りりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり  
今しと大いよいきりりりりりりりりりりりりりりりり  
入時は元禄二年午二月十九日星合十二辰乃狂云一書目大  
法甲賀之節の事抱の怪しと花道へ入るあををいりりり  
涙胸のつきさしぬき揚て脇法を一刀刺通すえりり市川  
思ひもよぬ事なれは是と福ぢあむあををいりりりりりり  
のをいりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり  
比身よのあふ希に名のりりりりりりりりりりりりりりり  
ふれいあふよ叶り思え何れよわいりりりりりりりりりり  
れりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり  
あれば付き居大いりりりりりりりりりりりりりりりりり

ふちを縄をうけてしすしうりばおき市川園田節ハ牛が  
習分あていまごあ後まて名流と云うが死すものせねのむ  
ういねをあらりて伯父のうき思ひしと云ふ二方力三方力打て  
きりとうやむねをきりたれば紙背ぢやういなるれども時を  
の曾子執事と云ふの人も後には事をほめ流しと云ふ後  
と後く松正を縄背と云ふ事一を中牛牛く遺恨の腹を  
あつとも外はさるる唯いさう恨まうゆと云うと云ふ  
ありし時松正と云ふ市川はつらつら我が心をあつた  
たしつらつら市川はさるる事をあつたさるる事と云ふ後  
す言ふと刑罰討ちしつらつらやうかあつた市川牛  
三郷心の塔中念佛院の昔のやうに法りもて是業信士  
と送り名せりゆ誠まき名天下にひびき又御府内あて  
月見女の歌ぶうと云ふ事おわりと云ふと云ふ園田十郎と云ふ

たより牛牛殺されて後ておと殺拘しと云ふ事と云ふ園田十郎  
をうづせせり中真は事紙と云ふ二代目園田十郎元祖も  
病しと云ふ事と云ふ事を慰む人は事を今おらう止めたり  
されば二代目園田十郎 松正のハ 天地微妙の男あて内外のさきは  
らびいさういさうと云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事  
海老敷の父ハ長柄や雛子の夢

此のをも押て考へし雛子も鳴ずらうと云ふ事と云ふ事  
と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事  
や牛死して存二十年の星を紙三味 松正 今も市村  
けりず是曾子勝母の里の中と云ふ大伯ハ海棠を待たず  
とうや孔子のゆかりも子ハびにはくはくを求めしは  
名をゆハ勝母と云ふと云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事  
名ありと云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事



人百姓の一日好見うーなるは女が種よとまりては唯あつて  
みと心好るといふくまうーは愛を愛とて是よか  
つと清浄なももこばを好むは愛たるるを好とてや  
命をたす人多くー愛より力をそへる守人乃ちたす事を  
愛愛の人ちがれーとー板佐理次たるい表徳を杜  
着といひーこの八橋と云佐徳よとて心たるぞー新玉の  
初買は桃柳より名のけり清ーが法はよ左京の才代もん  
りて信をたびーとー田畑もよあ賣拂ひことー身  
多よ成ーる今今中ー在里の屋もーとーは成にりり依  
城八もーも今を佐佐次たるがい病ー心をさーりわりあ  
れよい年なるれども勤の身せんうあーやまこめく作ら  
心のたやさこひらん今今誠もうす衣の身すゆーしきを合  
らるさーあふほど成ーとんくれば次たる其の程も病

世のまことなるもは毎毎よらあそく来中の所よすす  
八橋たる中ふかりては是らうとて思ひ迎ふれすや  
あせーこそせひなるれ次たる思ひりる我うんー心を  
そー身よをそし今かく病づれりゆるた世者今  
かくすなきややらるまのあーこの板紙の約林の夕  
の起落乃文を思ひせーいとらうめーうくれ女のいつり  
多よ事ー方よありたるらうらうとてまうし事  
まよさよはくは大坂の夕色方の友伴が紙のらとさの  
く同歩風神とら中ーまう方よま心をもー或時中  
こそ友伴夕色方の命ーが伴たる立とまうり夕色方の物を  
いひけー事まうにかりとて思ひたる方やさーき挨拶  
て今まうーまーますわとてぐー杯と大佛の馬所のか  
くれ家道をたすけはほもいりーと心をさすとうや大



集りても末うたうふをきやうりつどをぬく夕暮の影を  
りて友伊方いしざらうとらや佐城のこころと今の八橋  
が心の遠い祇の雲と墨の如くなり佐佐木命左衛門の八橋を  
うらむ家も道理うやかくて或時佐佐木命左衛門の八橋の  
よそ八橋よ出合をうらまうしつとふりそひいふよそあひ  
何とてかく情あふとをききをもうき終りぬぞ我のそらあふ  
こぼかしくぬりたりたのど涙を流しそひいなるを八橋の泣き声の  
新うらむ見らるしきや和らきん通りたるを佐佐木命  
左衛門の義理知らずと立腹して程もあふひはきやりて故また  
八橋をもも獲しそひいよかまひあふあふとほづやき中の何の  
業をほらや佐佐木命左衛門がうら遠入り二階くよらんすま  
をいつひて佐佐木命左衛門のうら入るが眼ざしぬきをき

たのき男の恥辱をうせぬる事こそ送眼たりの今かよ  
のぐううううううの女もあつたさうとちち力八橋がう  
ごら申候よりうしに腰より車よ切もあつた腰よりとら  
ごにあのそとをきき切をききとらよりやの業の産屋  
の中ごうとあつたり泣き声のうらうらうらにほろ固きの大  
こころもあつたそを靴釣靴といひうらやそ心水もきま  
らずよ縁あつたしそれより泣き声のうらうらにほろ固きの大  
思ひらん二階くよりお千代の申大門口よりたり例をほら  
ひ五河の若く大ききたよりうらうらにほろ固きの大  
やのうらうらすまうをききとらひいめきとら彼もきき  
あて切そたごりまうらうらゆくとらゆとすまうとら  
水もたごり切をうらうらゆとらゆとらゆとすまうとら  
あつたもふ叶してはあふは迎さんとそらんぬありたりとす



バほうのわぶとひとくちりるるるる二階お千底むりやうに水  
をおうけく又ハハ水の流るるるるるるるるるるるるるるる  
れバ流るるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる  
千に古本を多くはたして是とて是とて是とて是とて是とて  
りるるる又流るるるるるるるるるるるるるるるるるるるる  
るるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる  
ゆはこけらるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる  
を大勢おり置りては力な縄をどりきりりるるるるるるる  
るるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる  
るるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる  
建おるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる  
許おるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる

い事ニ甘喜子保の始りしは所二丁目兵庫屋の高湯と

云托女空のふあは教害せしれ一書と是と交り流るる  
阿まどもハ橋が事とい遠りりか書ふ云通知軒のあん  
道を鑑よもかハ書りりを幸も又二町目吉田をて  
教害せしれ一托女とらんもあは愚白ちハ是をば  
眼お甲見りりそ時の愚詠

鬼灯ハ一古三寸のやうきうか  
かくはすまみハ思ひぞ解るる影とをるる

秋彦妓傳介が傳

一とせ山村李吟の巻句よ

まのちハ一といますりりハ魂糸

いすの心ハ海澄よ子田なる事ハいすすが如くす神を祭る  
事神のいすすが如くとの聖澄よりおるるるるるるる

よかへは御志あり九人とも若君父のたのまひをたもひ  
申し一向念佛して僧を供養し香花を日向の吊り  
事い知れども鬼は仕る禮の根えを弁て併らへて  
いそ七父母存りし人の命はよき身を信存生るる好  
このうへををりたすとす人とは殊信とるなり世  
をまよひしといはずが如きの念と念ありそなり  
死は仕る事仕るに仕るなりごとくすも遠りぬ  
極しすあり父母一生の仁義を事なむし即して仁  
義のほどりしをてあつたなりい莫きの吊ひも  
の心遠りぬを徳りてとるなり迎年ふりぎれ  
後男と能あるなり聖徳ふりての念に今も者あり  
あつたなりを徳りて人形所依助と云者の店に  
他介と云者と根えいし尚地乃生るる七八輩の時より

は拙師を居山村長丈史隠居浄宗より小坊をなむふり  
淨因といふ徳を加へ我よりことなるはひり七輩の時  
より勤王家を始の年浄宗より細工に人形を一刻して彼山坊  
よりよふ坊の名に他介と申すなりや信所極へて  
人形を海のかたよりして持つるびりり人形男入形の厚  
板より白くして英男入形あり是より山袖名書なをきせり  
信所よりしるる徳より他介の人と云男形りそれより勤年  
の村に勤自心の山坊より正まふたの志の者とぞ  
今も稱するなり山村を居減都を 信所遠流の初葉も  
いふををを液あぐに流しきるる徳より他介と申し人形所  
より後居しきりかづきの山村より知るゆへに人形所  
といひきるとなり此者も後を因合を居たよりして後世より  
ね他介の山村よりして後を彼浄宗が細工とてなり小偶を

いふ一太事なり是らそ主人の形見たるは津守屋の心身は傳  
ありとて平生度々を直し春夏秋を待くの衣裳を  
まねいよ思ふとせ給たの自身配膳し或は茶菓をよとねく  
ましくせ女房娘も若ぬ人形さあつくふれりましと急夜中  
付います寸がごとくまをとりつれり親君は正敷に孝のす  
ぐどろしあへ人其のて心算する者何のて件の人形は何ぞ不  
禮よかよび是は形見の人形あどろば殊の介志實に後立  
して主人山村の形見の由縁をわたりし理を結て是を  
あひもゆ後少の迎所もそそ事を知つて後い他人も人形  
よ夫禮を思ほはどとれどもそ高座いそし人そ菊のま中  
より心りる人の是をほの又世智たる人の業うる人を大切よ  
を執事を兼一 公種もまよし思義の志たしし河村  
英も頼りたるしんと云つた心あてかゝるあるとといふ人

も何事とも不謂竟辭のまをす人へ別聖人たり盗人の  
志知たりとて他人の残室をうをひたふ刑罪たるを<sup>まか</sup>知んや  
他もは者とあつたりする忠貞あはゆ抑志實のゆも世々  
し現まると人たりつらんふたり事たる下しれわうた貞心  
くつて世も知る人がし叔父介の人形を抱きて春の上野の  
山はひ夏の夕暮の納涼を求んとてお茶橋の川舟のゆせ秋を  
角田屋傍乃月知まふをいふるをまの巨魁ふりてを<sup>まか</sup>知んを  
凌ぐせむるかのとて年月をそしきるお物も精方といふ事ある  
と誓ふ思儀あれば他介が分れとふともし危難の事すまこと  
ありしあふにけ人形面々に汗を流す事なまことふくれば  
忠貞のとて不是は天道の感せしするおあり世きどを  
なぐほら事とてや或は迎ふお火の前よ知るをりし  
そ用意をとりて膳料を地喧喧と錦の場をのりて英を

ゆづる事もとせりとたりのされば人形行を流すと傳介の人形  
さる乃まてあせらぬつりとて家内意を法他出をもとめ  
は〜〜とせり如世〜〜とて老をさけきるこ世なき事ど  
う〜〜と後心をもす事もわづらの月の方勤事もたるとん  
う〜〜と後心もす事もわづらの月の方勤事もたるとん  
英〜給下りし者累年人形を飽ず心をもすこととつり  
いふに不及深堂のゆづりまひうたよ者田舎芝居く出る事ゆ  
りて毎事を圖く趣を五十九百日の箇中乃て女房若くは娘  
のおまるととせり福んごゆり付家箇中もわづらうす人形ゆ  
も淋〜思ひらんかま〜〜と〜〜と〜〜と〜〜と〜〜と  
然るや付出らるゆづりまの箇中女房いうたれば二十日も  
すぎ〜後〜配膳茶〜〜の夜を過りければ傳介は  
時上別扱老宿の旅籠〜〜と居り〜〜と夜の後まの箇中表

の箇中に並〜人形あり〜と見〜駭〜〜とせを流〜とて教  
色平生に替り〜つれい傳介愛さぬ〜大おとろきはい〜  
江戸表〜と愛なる事ゆ〜〜と〜〜と〜〜と〜〜と〜〜と  
の〜とをば他人のれ〜〜の江戸〜ゆりて妻子よおのれを  
物給〜〜は女房さんげ〜〜人形〜跡男の首を〜〜と  
と兼人形をぬひ〜り女房と申す〜〜と痛死〜〜と傳  
介思ひ〜い人形いも〜壮年の像〜今も〜お存生た〜とゆ  
事〜も余程を悲〜〜と〜〜は厚びんの像の似合〜ゆ  
と人形白髪のおま〜んと〜人形所前〜池〜を裏の件い〜  
者〜ゆり〜〜と伝作〜ゆ〜〜と忠貞人をば天〜ゆ  
〜と喜福音せん〜と〜ゆ〜〜と〜〜と〜〜と〜〜と  
が〜人の娘お〜〜と〜ゆ〜〜と〜〜と〜〜と〜〜と  
む〜と〜ゆ〜と人面交り〜〜と〜〜と〜〜と〜〜と

かゝる傳介も既に年をうけた世の中乃三帝を觀し人形さば  
も今も此の存生たうばは法新の時故ありとこそ又爾處  
りつゝ人形を法師よりそ身傳介もあはれ心して出家と  
ありし事の家より身を習得も人よりすげんておろしたる人  
は嫁せん事もふ叶と念をたうし傳介の家信と法名は娘は  
妙さんと名を改めて念佛執りしきるがそ人形の今世時もそ  
傳介の料理も是より精進の地菜をうくの配膳たこ  
うす後い地蔵芥を建之し地蔵の版こもそにそ人形  
を入並て申所おろ地蔵をむとび居るが今お古とぬ  
り減し不思の徳実の者たうりたりとこそそ喜提下申所  
中のつ普賢寺と云伝寺うんがうらを感して厚く養ひ  
そ地蔵をも今お普賢寺よりそ普賢寺より現をわらう信  
り人もたうし武士ふあうらんまらつるもそ家のためり歐なき

男なり匠更をも志い奪ふんぞういはい心たうらん一とせ  
白兔園がうし

燈籠見や秋夜の芥ハかゝらうとぬ  
あまの甲が史師家瑞高よおろし乃そ向うぬらつて縁ども  
彼傳介が記を申書よ一向の向もそ風物ありてたうらぬ  
ひつをかりて是を吊ふのそ見る人まあ美の師と君父く  
つとあまのふかきとぬと爾尔

補給中親しき親よ彼人の生涯乃お智をせし人  
多うとい書ふかきとせし徳実をいし堂の  
別書よ洋せしめ

多賀長湖画二百人女蕩う島  
御処台遠流後年英一蝶と成事

久保の江洲藩の縁由

如命の事とて、何れの内侍

かきをいふ是をいふありあはるをいふは、模する事画工  
の所より金園が書けるも、歎の巻たふく、出く、秋の戸の  
萩を喰ひしと、少名畫の精身、今くふ思案を見する事  
和漢を介する、将野探偵が思ひ、知の竹の画、古今の  
出来たりといふも、そま、皆陰形、して萩の竹は、姿あり  
といふて、秋の探偵知らず、その父探幽、自中に行を画して、渡  
り、よ、好夜、清書、して見するといふも、父の氣、よ、色、せ、は、大  
い、は、何りて、い、の、介、ふ、意、用、え、是、あ、て、画、と、い、り、ま、る、き、か、そ、ま、る、か  
と、い、て、い、家、え、の、家、智、ふ、可、成、と、教、へ、よ、言、り、ら、ん、バ、探、偵、子  
は、是、を、和、く、筆、を、も、に、描、く、仕、然、と、い、て、萩、を、あ、ら、ま、て  
福、も、や、ら、ん、葉、ど、わ、づ、く、い、く、ま、ま、よ、お、い、も、萩、の、風、を、や、ら、ま

吹き信々、時、も、庭、の、前、の、竹、あ、ひ、く、系、際、子、に、り  
は、ら、ん、の、始、く、是、を、い、ふ、と、い、て、忽、そ、萩、女、を、画、野、百、父  
探、幽、の、見、せ、ら、ん、い、是、こ、と、誠、の、画、こ、と、い、ふ、べ、く、精、身、を、あ、く、信  
り、妙、なる、女、た、り、保、是、い、紫、足、陰、形、し、て、萩、の、竹、なり、と  
い、い、と、や、名、人、の、よ、ふ、た、か、家、か、い、ご、の、見、か、け、了、轉、り、り、是  
を、職、と、い、ふ、や、天和、自、享、の、末、久、保、の、比、鶴、村、女、信、永、ま、の  
子、に、多、賀、長、御、と、い、名、有、り、画、の、名、を、執、ら、り、つ、く、う、精、  
身、を、入、く、と、い、の、名、を、い、り、物、れ、ど、も、心、風、の、繪、と、い、い、う、萩、名  
人、よ、め、こ、も、家、え、の、よ、に、ま、か、く、と、多、年、子、ま、て、一、流、の、歌、を、  
撰、ぶ、事、と、今、世、一、蝶、流、と、い、画、を、か、き、始、り、後、英、一、蝶、と、い、い、  
は、長、御、が、事、た、り、い、者、久、保、始、り、と、徳、の、事、は、台、と、い、て、一、夜、遠、  
流、と、い、ま、い、り、い、事、の、ま、実、を、い、に、久、保、の、年、れ、大、君、と、  
常、憲、と、細、吉、将、軍、東、照、宮、五、代、と、い、と、好、色、と、い、け、く、也



市判棟たるに教生をこのいふをを魚を釣し科を成し  
也書育のくしそ介所をのまは後なる別書御杯びりして  
配所、珍の具持糸、後、とまけりる右と通云 信育より彩る  
配所の月、詠、八十、ききて漕出せといひ、と根をい自思  
と目ささえぎり眼前山鏡むらして、煥年の功成、誠、画子の妙  
をけり、家かおかく、姓名を改めんとおのい、き、や、名を英と  
背より、千、は、自、は、名をの、す、是、より、英一蝶と、世、界  
少名を、解、り、離、れ、と、一、を、ま、け、を、倍、は、今、鴻、一、蝶、と、  
こ、ま、す、後、年、章、廟、乃、御、代、瑞、免、許、云、御、背、より、は  
れ、百、人、女、屠、り、内、お、傳、の、少、る、舟、道、遠、の、仲、お、極、お、身、よ、て、え、す、り  
より、し、た、ゆ、外、の、あ、ま、り、と、ふ、あ、の、い、り、い、も、を、應、の、り、と、よ、あ  
て、刑、せ、ら、る、事、は、あ、ま、も、と、ら、る、と、い、う、と、い、う、と、憂、ふ、る、色、な、り  
し、蝶、の、百、人、女、屠、り、我、も、い、う、と、い、う、と、あ、い、い、が、び、と、い、舟

島を画くこと、不遠、意、た、れ、い、意、く、そ、島、を、か、き、び、き、り、十、軒  
を、家、ふ、七、八、お、持、つ、て、英、一、蝶、が、画、の、後、書、舟、と、云、終、り、と  
渠、が、門、弟、た、も、多、く、後、書、舟、の、島、を、急、ぐ、と、尚、付、英、一、蝶、た、ど  
多、く、い、島、を、お、り、と、す、と、せ、後、書、舟、の、幅、画、の、島、も、い、と、是  
を、好、む、と、い、う、種、人、多、う、り、と、い、う、や、と、後、書、舟、の、島、は、彼、お、持、つ、た  
は、い、と、を、お、り、い、と、を、お、り、と、い、う、舟、の、女、の、群、の、名、あ、り、と、獨、は、い、  
を、お、持、つ、た、り、い、と、を、お、り、と、い、う、と、記、す

後書舟の瀆

あ、ま、の、病、い、と、ま、よ、ち、き、り、を、う、と、と、て、色、紙、枕  
ま、つ、り、と、が、舟、の、山

後水尾院御製

い、一、蝶、の、百、人、女、屠、り、の、画、を、え、り、と、と、後、洛、陽、西、川、祐、信



といふ家淳世絵師好ましく枕画の名人といふれしが或年  
百人女宿亦定こと云大目隠し事を画しその後離れ  
思ふ枕絵を板りして雪の人の姿を法がひ終ふ思  
し居んことなるを一方の枕席密通の跡を控板して  
法源殿の法まかきを和子壺のかきし妻秋のこぼと  
乃わも函秋のたごの妻むえといふし玉芝扇の中の  
かきし事を画せしにものて終しと徳より是を又  
きびしき御処りて板を削らる級ひしきりしや是  
世人の知る所ありそ後好む本抄せしを賣買をさめ  
絵ひしを今ひしそよ高ふ事六條しごとくは西川も  
蝶が羽をふんで如世たるもいひはくらぬ

親世たるを教も妙をひし事并竜神感念の并

え縁の俳集あり

身を控してある思ありそ焼茶

ひらよひの合をく  
常憲公の御代は親世座の右教のこころたるを人としよ  
今と縁の役者よりえ祖たるはさきりあてたりきりにて  
そりしよあつた者を名の字とくしりしと或御能の  
りりしよ春日御神のそりしや群の右教をおてたりし持  
し扱をさるり向く扱せしと計しとおしとそ同にお耳  
少く拍子を合するこころ今右たるがしと云妙のいた者がお  
婦て法流も傳ふと云丸るうしりしと云はくよふなる  
と云いぬ御絵もその力を拍子とく取戻す事多人  
のこころりりしと云こころふと云んうしりしはた者かたものぬきて  
向くこころい各人の辨たるを合ししと云親世たるを右母波

一海くこそ西海より一海海せしに漂くしる海と船を  
まに大勢あり一船を後に動かした船は天に  
向ひしきる大船は魚の群に船中の人を見せし  
より九の海とめたる人と思ひしよとち一海の  
何れも海と流しめし流して流ゆきしりあり  
沈らぬ海は是竜神の見せし今大勢よりさけ  
まのそ人を海中におた龍神をたのぶ大勢の命に  
しんとしひつるバのり命しんかたふふ  
いすげかき肩腰背お思ひしよ流し入る経を伸して  
心抱もたよりきり地をたれきなが流しお汁ら  
まひて水底に入るといお地しよとめくも  
世人こそとまきさつぐ船は構えさうりいそぎたを  
海とめんとしきりた言せんかたういふも大勢の

いふさうしよのちをたれむむさやうもか  
まのめてふたりさり船ごとく一生の名残ふ日頃  
まにたれば一曲を鼓の息を吹して後に入水す  
暫時もちあつとそ物をほとさ一挺をえし心静  
まらぬしよとあつとあつとわさのたれ柳  
のそ人のしりのりを結ぶらうと報謝の舞と自ら  
ふむを鼓乃秘きうとそまうと今述漕てもゆぬ  
すしよといひしりゆきこと返風よまの帆をく  
しりも船しんふ思海の命をのぐれ奇意の思ひを  
たうしよとあり是龍神感念の達人といふ  
爾尔

示時明治十九年仲冬

筆者

妻木賴德



